

ああ、相談業務

～康弘くんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

22

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

益々増えている不登校やひきこもり。不登校がこれだけ多く成れば、誰でも不登校になりやすくなるだろう。そして学校に戻れぬまま、家庭内暴力やひきこもりになる子もいる。今回は、進路に悩んだ高校生の事例である。

家族

康弘くん（以下彼）の家族は、父母と彼、弟の四人家族。父親は公務員、母親は専業主婦だったが大学卒の知的な方だった。いずれも40代で、筆者が出会ったとき彼は高校3年生だった。

家族は一戸建てで、家庭としては比較的安定した家庭に思われた。父親とは会ったことは無いが、母親は穏やかな雰囲気の方だった。

相談経過

北海道の短い夏休みに入りお盆が過ぎて秋の気配が感じられる頃のこと、母親が相談室にいらした。主訴は、長男の不登校と、家の中で物を壊したり投げたりすることだった。高校3年生になって夏休み前くらいから学校に行かなくなってしまったそう。それまでは休まず登校していて、成績もそこまで悪くなかったのも、父母ともに国公立大学を目指せるのではと期待していたそう。学校からもそのように言われていたのも猶更である。

母親の話では、小中高と特に問題なく過ごしてきたし、特段反抗期も無かったとのこと、今回の問題行動について大きなショックだったとのこと。

こんな行動は大体中学2年生くらいで起こるが、そういう行動が高3までなかったことが分かった。聞き分けの良い、おだやかな良い子が急に暴力的になって母親がショックを受けるのはわかるが、そういう日が来ることを考えていなかったとしたらそれも無知というか不用意というか・・・。

とにかく母親は「どうしてこんなことになったのだろう?」「私の育て方が間違っていたのだろうか?」と悩み、自分を責めていた。そして、「どうしたらよいのかわからない。」「いつか父母や弟に危害を加えるのではないかと不安。」と繰り返す。

そんな母親の不安を受け止め、理解するように努め、母親を支えるように話を進めていった。

そして、物を壊すのは良い行動ではないが、壁を殴ったり蹴ったりも含め、思春期の男の子にはありがちな行動なので、それが、自立に向けての一段階であること、母親の育て方の問題と考える必要がないことを伝えつつ、暴れているときは放っておくこと。落ち着いて話せるときは会話を楽しむこと、進路の話は今はしないことなど母親と相談して決めた。

また、今までの生育歴を聴きながら、彼に何かしらの特性や病気がないかをアセスメントして、彼の得意科目や好きなことなどを聴いて行った。進路についても行きたい大学や学びたい科目が決まっていない様だった。目標が決まらず不安定になったのかもしれない。発達の偏りは今まで目立たない程度だったことを考えると、そこまではないか、そんなことを考えた。高校に戻れるかどうかはわからないので、できれば彼に高校卒業程度認定資格試験(高認)を受けさせてはどうか、そして彼自身との面談をしてみたいので聞いてみてほしい、すぐに変わることは無いかもしれないが、様子を見ていこうと伝え、母親の不安の払拭のための心理療法を伝えて2週間後に来てもらうことになった。

その間に巷では若者が関わる事件がいくつか報道された。覚せい剤がらみもあった。そして2週間後にいらした母親は更に不安そうになって

いた。

母親からは、高認試験は学校にも相談して一応申し込みをしたこと、最近彼が薬に興味を持ち始めて、あれこれ調べているとの話があった。物を投げたり壊したりということは少し収まって、ネットで調べては薬の効用について話しているという。薬に興味を持ったということ自体は悪くはない。しかし母親は悪いほうへ悪いほうへと考えてしまうようだった。爆弾作ったりしないだろうとか、覚せい剤を手に入れようとしめないだろうとか・・・。勿論可能性がゼロとは言わないが、心配しはじめたらきりが無い。薬の話だと、母親と普通にいくらかでも話せるようで、母親との会話の量が増えたそう。しかし学校には行きたがらない。そろそろ単位も危なくなってきたとのことで、高認試験を受けることについては彼も了解した。もともと進学校にいるし、高2まで単位を取っているので、高認試験で受けねばならない科目数は2つくらいだった。彼もそのくらいならと思ったようだ。将来について彼がどのように考えているか、進路について話せたらと思っていたら、母親から彼が相談に来てみたいと言っているとのことで、日程を調整することになった。一回母親が話したくらいで、カウンセリングに来るというのは珍しい。どんな子なのか、興味津々でいろいろ想像をめぐらしながら面談の日を待った。

それから数日後、彼が来室した。なぜか私が想像していた彼のイメージとはずいぶん違っていた。私の中では「中肉中背、眼鏡をかけた、比較的口下手で、大人しいイメージ」だったのだ。何の根拠もないが・・・。ところが彼はスラッと背の高い、細身で中々のイケメンで、初対面でもあまり気にせず話す子だった。一応家族との関係性については確認した。父親がやや厳しいこと以外関係性に問題は見られなかった。むしろ国公立大学に行けという期待感に負担を感じていて、父親からは工学部(父親も工学部を出ていた)を目指してはどうかとされていることなどが少し話された。あとは勿論薬の話ではある。まあ調べまくったのだろう、薬の話は止まらなかった。1時間

近くの面談時間の殆どが薬の話で終わったが、最後の方で、「そんなに薬に興味があるのなら、薬剤師になるとか薬の研究者になるとか考えたことないの?」と言ってみた。すると彼は「え?それは考えていなかった。理系かなとは思っていたけど、工学部を勧められていて、でもあまり興味のある学科が無くて・・・最近まで薬とかにもあまり興味が無かったから・・・。」「ちなみに理数系は得意?」と訊くと「得意です。特に化学は大好き。」とのこと。「しめた!」(これは心の声)。進路を決めかねていたので、「薬学や化学を学ぶ方向で考えてみたらどうだろうか?」と提案してみた。すると彼の顔がパッと明るくなった。

それから1週間後母親が来室された。彼は家で暴れることも無くなり、学校にも行き始めたという。高認試験は一応受けるつもりだそうだが、学校に行けているなら無理しなくても良いかなと伝えた。母親はたった数回の面談でここまで来られたことをとても喜んでいて。彼は人が変わったように勉強を始め、公立の大学で薬学部を目指すことに決めたそうだ。それに対し父親も認めてくれたそうだ。母親の努力、頑張りを認め、褒め、これからも彼を見守ってあげてほしいと伝え、相談は終了となった。

その半年後、母親から電話があり、某公立大学の薬学部に合格したとの報告があった。

まとめ

高校生の進路決定については、いろいろな問題が起こる。学校が一方的に進路先を押してくることもあるし、保護者が決めてくることもある。本人の意志や得意分野を考えなければ、無理やり進んでも上手くいかないだろう。本ケースでも、本人は引かれたレールに乗ることに抵抗を感じ、それを表現するのに物を壊すという行動に出た。父親の決めた方向に対し、面と向かって「嫌だ」と言えなかったからである。それでも彼の場合は、勉強もできたし理数系が得意で彼の興味関心と

マッチするものがあったから良いが、これが全く見つからないこともある。そんな時は、よくよく掘り下げて、本人の得意分野或いは興味がある分野を探さねばならない。成績とは関係のないところに本人の興味があることも多い。

大学や専門学校への進学は、私立の場合お金もかかるので保護者との相談が欠かせない。兄弟がいるために、公立に入れる力が無いと私立に行つて奨学金という借金を抱えねばならないということも多い。保護者が「公立以外は行かせない」と言い切ることもある。

日本は教育にお金をかけていない。先進国で比べれば一番低い。誰もが国公立に入れるわけではない。私立大学でも専門学校でも、彼らが学びたいものがあるのなら、学ばせてあげたいと思うのが一般的な保護者の思いだろう。それを金銭面であきらめざるを得ないとか、借金を背負わせるとするのは悲しい話である。少子化が進んでいるのだからこそ、誰もが学べる機会と借金ではなく給付型の教育資金が与えられるようになってほしい。そうすれば、もっと力のある、学ぶ意欲のある子が専門の勉強に入っていけると思う。

本ケースは幸い公立大学に入学できたが、薬学部は6年間で、私立大学だと数百万円から一千万円かかってしまう。医学部だともっとになる。お金の関係で子どもが行きたい方向に行かせてあげられないと嘆く保護者にも出会う。

大学、大学院までの教育の無償化が実現できるのはいつになるやら・・・。